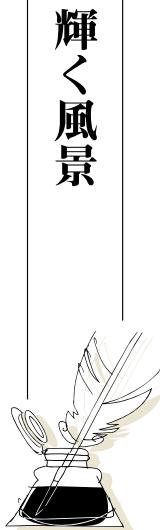


人生讃歌

小樽
博

草の吸い殻、プラスチックの弁当箱など毎朝、大型ビニール袋に二つ以上あるという。



輝く風景

以前ある雑誌の仕事で、地域に住んで静かに何ごとかをしている人をたずね、話を聞いて書いたことがある。そこでぼくは自分が忘れていたことを思い出した。つまり現代がどれほど厄介な世の中であれ、われわれのなかにあるはずの善意を根気よくはぐくみ守り続けてゆけば、新しい方向が開けてくるに違いないという希望である。

★

大きなタクシー会社の専務取締役をしている男性が、道路などのゴミ拾いを十年以上も続けていると聞いて、お会いしに出向いた。五十五歳だというその専務さんは『十二年前、私は毎朝五時ごろから近くの公園を散歩していたんですが、その公園や道路のゴミを拾っているお年寄りがいました。八十歳で足が少し不自由でしたが、私は一年半もの間、それを見ていただけでした。ある雨の日、雨合羽を着てゴミを拾っているその方の姿にうたれて、自分もゴミを拾いはじめたんです。思えば一年半もの間、ただ見ていただけの自分の浅はかさが恥ずかしいです』と言った。ゴミ拾いの場所は野球場、ソフトボール場、ゲートボール場、テニスコート五面、駐車場、記念植樹の広場、噴水のある公園など広大な範囲だ。空き缶、空き瓶、犬のふん、煙

などのゴミ拾いを連立方式も楽に解けるそうだ。新聞は隅から隅まで読む。専務さんが言う。『私がゴミを拾うのには何の理由もありません。ゴミが落ちると気になるだけです。目の前をきれいになると気持ちがいいからです。こんなことに理由なんてないでしょう。ただ言えばいいと思つんです』最近いっしょに拾う人が増えてきたうえ、捨てられるゴミも減ってきた気がするという。たぶん捨てる人を見て捨てづらくなつたのかもしれないといふのは考へる。表彰の推薦も固辞している。『人として当たりまえのことをしているだけで、とても表彰されるようなことではありませんから』と言つる。

専務さんと別れて駅へ向かいながらぼくは、まぎれもなく僕

出した人に出会った感動で体が震え続けるのを感じていた。



あるとき、廃山になった山奥の石炭村に、頼まれもしないのに近所の家の玄関の戸や壊れたトイレを直す人がいると聞いて会いに行つた。Tさん、七十六歳。二十年前に奥さんを亡くして一人暮らし。一人の子供は結婚して札幌に住み孫もいるという。地域の人々に感謝されているそうですねと聞くと『なんもやつてない』とそっけない。雪が降ると朝五時に起き、独居老人の家を回つて道路や屋根の雪をよける。寒い日はゆっくり寝ていたいが、困っている老人のことを考えると、とても寝てられないと言



挿絵/中江潤一

う。道路わきにある共同風呂は温泉で、四キロ山奥から引く湯で温度が七度と低いためTさんが灯油で沸かす。毎週一回、日曜の二時から六時だけで十五人ほどが入りに入る。湯を捨て桶や湯船を洗うのもTさん。『そばに住んでるから当然のこと。こんなことで喜んでくれるんだから、こっちが嬉しいよ』と照れる。近所の人々に聞くとTさんは道路わきにコスモスを植えたり、お年寄りを集めてカラオケ大会やカルタ大会もやるという。独り暮らしの七十歳の女性は『Tさんいなかつたら私、札幌の息子のところへ行く。Tさんいるから私ここに住む』と言う。『Tさんは地域の家の風呂や窓や台所が壊れるとすぐ直してくれる。新しいトイレや風呂も作ってくれる。材料はTさんが集めててくれる。それでお礼しても受け取らないんだ。年金で食べていけるからって』と言う。

秋田生まれのTさんは二歳で父母と北海道の炭山へ来た。長男で下に十二人も弟や妹がいたため十四歳から炭鉱で働き、二十歳で兵隊に行き中国へ。終戦後また炭鉱で働く。『貧乏で妹や弟ら五人も亡くなつた』とTさんはうつむいた。父が珪肺病で死亡、やがて母も死に、三十二歳のTさんが七人の弟、妹を育てた。当時Tさんはカネがほしくて有給休暇の日も働きに出てカネにかえたという。



ぼくはTさんと別れて山を下りながら、Tさんが最後に言った言葉を反芻し続けた。『こんなこと馬鹿くさいと思つたらでkins。みんなの喜ぶ顔を見るのが楽しいんだ。とにかく人に声をかけられるのが嬉しい。人間、人に声をかけられなくなつたらおしまいだ』

道路わきに続くコスモスの花が、夏の陽に光り輝いて眩しかつた。

